



CONTENTS

PROLOGUE 天使の思惑 7

だから、嘘をつく 41
胸いっぱいの愛しさを 55



終わりの始まり 73
遥かなる時の中で 93
クリムゾンレッドの泪 123

Missing 181
BLUE MOON 237
還る日 255

EPILOGUE 永遠の始まり 297



EPILOGUE 永遠の始まり

金細工で装飾が施された重厚な扉を開けると、部屋の中央にある大きなベッドが視界に入る。月をモチーフにしたデザインの下、ベッドの真ん中に目を閉じて横たわるベジータの姿に悟空は目元を和らげた。手に持っていたスープを乗せたトレイをサイドテーブルに置き、ベッドにドカッと遠慮なく腰かけて顔を覗き込む。するとベジータが瞳を開けて悟空を見た。悟空は微笑みかけながら言った。

「なあ。ちょっとは動けそうか？」

「ああ。少しばかりならな」

ベジータが答えて、眉をぐぐつとひそめて身体に力を込め、ベッドから起き上がろうとする。そんなベジータを悟空が慌てて制した。

「いやいや、無理しなくていいって。一万年以上固まってたんだからさ、最初はちょっとずつしか動けませんよってウイスも言ってたろ？」

「だがいつまでも寝ている訳にもいかないだろう」

「それはいいよ別に。時間はいくらでもあるんだからさ」

悟空が笑って、サイドテーブルに置いたスープの皿を手取る。そして濃い緑色の栄養価の高そうなスプーンでひとさじすくい、ベジータの顔の前に差し出した。

「ほら、元気になるスープだって。なんか緑色でちょっと気味がわりいけどさ。ウイスが

作ってくれたんだ。食うか？」

悟空の差し出したスープをちらりを見て、ベジータが目を伏せた。

「いや、今はいい。食欲がないんだ」

「そっか」

悟空はあっさりと頷き、差し出していたスプーンを皿に戻した。そしてベジータの身体を覆っていた布団をめくると、白い夜着の上からベジータの腹部に優しく触れた。

「おめえの内臓はまだ寝てんのかもしんねえな。起きてからまだ何も食べてねえだろ？ 食べたほうが元気になるかなって思ったんだけど」

「そうかもしれないな。だが腹も空かん。だがそれは神であるおまえもそうじゃないのか？」

「うーん……確かに食べなくても生きていけるんだけどさ、食べねえとやっぱ力が出ねえ気はするんだよな」

「確かビルスもよく食べていたな。破壊神とは食いしん坊になるものなのか？」

そう言ってベジータが少し笑う。

「どうか。でも長く生きてるとき、どうしても美味しいものを食べることが一番の楽しみとかになっちゃうんだろうな。オラは旨いもの食うより強い奴と闘う方が好きだけど」

言いながら、悟空はテーブルに置いたスープをひとさじすくって口に入れ、眉をしかめ